



コラム3

我が町東久留米が大好き

1950（昭和25）年、当時私が小学生の頃、落合川や黒目川には沢山の魚がいました。黒目川の縁の南側や落合川の北側は一面が田んぼでした。川では沢山のフナ、コイ、ナマズ、ドジョウ、ハヤ（ウグイ）、時にはウナギも取れました。私はイタヅラ坊主で学校から帰るとカバンを放り投げて川に行き魚とりをくりかえす毎日でした。魚のいそうなえぐられた場所の周りの田んぼの土をスコップでとって囲い、魚が逃げないようにしてバケツで水をかえだしてとる方法でカエボリと呼んでいました。バケツ半分ぐらい、50匹から100匹程度は取れたと思います。魚はほとんどが真っ赤な腹でうろこがザラザラしたハヤ（大きさ20cm程）で、それより小さな当時ゲバチという魚も取れました。ハヤは、串差しの塩焼きが大好きでした。収穫後の田んぼの水たまりをクワで掘り返すと人差し指程の大きなドジョウが土の中から取れ、醤油で煮て食べましたが苦くてあまり好きではありませんでした。アマッコ（ホトケドジョウ）も食べましたが、小さいため食べた記憶は少ないです。田んぼのあぜ道ではピョンピョンとイナゴが飛びはね、母から布袋を作ってもらい兄弟で袋一杯のイナゴを捕り夕ご飯のおかずになりました。



東久留米市郷土資料室所蔵写真

宮下橋周辺は、水が豊富で流れも強く澄んでいて川底のジャリや水草がよく見えていました。深さは浅いところで当時の私の膝上で、深いところはヘソ位まであり、溺れることもありました。魚が沢山取れて、カジカ（トゲウオ、ムサシトミオ）が網に入った記憶があります。カジカは、つかむとトゲが刺さって痛く嫌な魚でした。大きさは5、6cmでたま網にかかってもすぐ逃がしてしまいました。ただ、数は非常に少なく取れると珍しい感じでした。泳ぐ姿はメダカのように左右に小さく震えるように泳ぎ、横腹は真珠のように輝きがあって綺麗でした。そんな記憶はありませんが、他の魚のように食べたりすることがないので、今の様に貴重な魚という意識はさらさらなく、記憶は薄いです。

畑では、大根が盛んに作られ、農家には直径2m以上もある樽があり大根をヌカでつける姿がよく見られました。大根が綺麗に天日干しされている風景も見られました。また、ブタや牛も飼う農家が出て、50匹100匹と飼っていました。農家の周りにはオナガを始めムクドリ、キジバト、スズメ等が沢山いました。もちろんネズミも沢山のいましたから、夜になるとフクロウの出番でした。

市の鳥オナガは、非常に仲の良く、仲間を助け合い、集団で生活し、昔は非常に多かったようです。それはオナガの生息環境に適していたからだと思われます。オナガの好きな柿の実も農家の庭先にあり、ねぐらとする竹林も農家の裏山にはほとんどありました。竹林は根がしっかりと張り崩れないため、防空壕を掘るには適していたためです。

東久留米では商店と農家がほとんどで、自然豊かな黒目川、落合川は、生活には欠かせない川

でした。洗濯をしたり、農家が市場に出す野菜を洗ったり、私たちの遊び場でありました。田んぼのあぜ道の土をとって農家の親父に追いかけて逃げ回ったこと。スコップやバケツを川に投げ込まれたこと。だけど沢山の魚を捕った時に農家の親父さんにバケツごとあげてほめられたこと。夕ご飯のおかずにと家に持ち帰り母に喜ばれたこと。当時のイタヅラ坊主として、思いっきり遊び思い切り怒られて飛びまわって逃げたことが懐かしく思われます。

1960（昭和35）年ごろから田んぼに都営団地ができ一気に川は汚れてしまいました。もちろん魚もいなくなり、ホタルも見られなくなり、カエルの合唱もなくなり、動植物も見られなくなって、田園風景はなくなりました。昔のような落合川、黒目川には二度と戻らないが、反面、河川が改修され安全に誰もが川沿いを楽しむことが出来るようになりました。

コラム 4

東久留米の思い出

幼い頃私は、久留米村にひと先ず疎開致し、繁くなる空襲を避けて、近づけば遠ざかり遠ざかると近づいて来るようなコノハズクの寂び声のする秩父三峰神社境内に移りましたが、戦後は再び久留米村神山の氷川神社の横に引っ越し、そこで小学生時代を過ごしました。対岸の牧場が一升瓶に搾りたての牛乳を入れて、湧き水(注1)のところに冷やしがてら浸けておいてくれたものを取りに行くのが毎朝の日課でした。

当時は、人口九千人足らずの農村で、その自然環境は、川遊び、野遊び、山遊びを好む子供たちにとり、お誂え向きの生活空間でした。村では林や森を「山」と呼んでいました。私が住む大字の辺りには、凡そ井桁に似た広さの湧き水が幾ヶ所もありました。それらの源から始まる小川を一条一条静かに集めて下る澄んだ流れには、車馬用の橋の他に、丸太の一本橋や二本橋が渡されていました。

長さが二間程の丸太橋の上からは、ハヤが砂利底で産卵期に見せる、はちどりの空中静止に似た仕種に目を凝らしました。淀み(注2)では、その中央部まで迫り出した老木の幹に這いつくばり、眼下で群れて舞うタナゴの体側に煌めく、淡紅の婚姻色に心を奪われました。この川ではまた、ゲバチやドジョウを底の泥土に探り当て、浅瀬の石の裏側に巣くうカワムシを捕え、アメンボ、ゲンゴロウ、イモリ、ヤツメウナギの固有な姿に興味を募らせ、深い「うろ」を半楕円形状に囲む小さな水仕切りを土砂で築いて掻い掘りを試み、寒い季節の夕間暮れには岸沿いに置き針を仕掛けて歩き、夏の堰で水浴びにはしゃぐ屋下がりもありました。

川に続く田畑や藪の中では、カエルとヘビに折々出会いました。耳腺から毒液を分泌するヒキガエルの眼にも、実はトノサマガエル、アマガエル、アカガエルと同様に、多少おどけた人懐っこい表情が映ることを、知らず識らずのうちに発見していました。親指と人差し指でアオダイショウの首筋を背中の方から柔らかく挟み、落ち着いて優しく観察する態度の大切さを、父から初めて教えられた場所もここでした。



山では、薄紫色のサクラケムシを腕に這わせても、安全で心配のないことを知りました。栗の花が開く頃は、青白色の長毛に覆われたフリケムシを両の掌いっぱい集めて帰り、家の庭でその腸を酢に浸して太目の天蚕糸を作りました。大きな声で鳴くクツワムシや木の枝のようなナナフシ、涼やかなイトトンボ、オハグロトンボや色様々な蝶、雄々しいカブトムシやクワガタ、空高く空中停止しながらさえずるヒバリの声も懐かしく思い出されます。夕空のコウモリやイタチ等の小型哺乳類の動作に見入ったり、ムクヤシイ、クワヤグミ、キイチゴの実を口に含んだりするひと時もありました。

子供の頃の思い出の片鱗にすぎませんが、このようにして遊んだ川や野や山は、ありのままの自然に接する喜びを私に教えてくれました。人には、見た目には違和感を覚える対象を直観的に疎んじる性癖が、多分にあるようで、身近な野生生物に親しむ機会は、子供達がこの種の傾向から、解き放たれて行くことに貢献しそうです。外観の体裁から心理的束縛を受けることなく、素直な目で自然の温もりや人の温もりを読み取り味わえる心——そのような心の奥行きを、子供達と動植物達との触れ合いは、一層深めることに与って力ありそうです。



かつての小野殿淵付近

- (注1) 現在の昭和橋より当時水田の中の道であった昭和新道を南西方向に上るように進んで落ち合う弁天川右岸にあったとのこと
- (注2) 黒目川と落合川が合流するあたり(現在地より南、江戸時代の鷹匠頭小野家の屋敷があった落合川右岸の高台下)にあった小野殿淵(おんどろぶち)とのこと